研究ノート

# 奮然将来の宋代木版画「文殊像」について

荒木計子

## はじめに

京都嵯峨清涼寺の現本尊釈迦如来立像は、平安中期に奮然が北宋の太宗から許されて模刻した優塡王造立の伝承を持つ瑞像である。昭和二十八年、その胎内から造立記をはじめとする夥しい納入品が発見されたが、この中に宋代の木版画四枚が含まれていた。内一枚は文殊騎獅像で、これは宋代の五台山の文殊信仰を知る上で重要な図像と思われるので、この木版画「文殊像」について考察してみたい。

## 一、木版画「文殊像」の性格

瑞像胎入の北宋期木版画四枚の内、「霊山浄土図」（縦七七・八cm、横四二・二cm、紙本）は奮然に同行した嘉因喜捨と記され、二枚の板木を継いで彫ったもので四枚の内では最大、上半部は釈迦が霊鷲山で諸衆に囲まれて説法する様子を、下半部には『法華経』見宝塔品中の多宝如来出現図が描かれている。次の「文殊菩薩騎獅像」（縦五七・七cm、横二九・八cm　紙本）と「普賢菩薩騎象像」（縦五七・六cm、横三〇・一cm　紙本）の二枚はいわば霊山図とセットであり、釈迦・文殊・普賢の三尊形式を意識したものと考えられる。残りの「弥勒菩薩像」（縦五四・四cm、横二八・四cm　紙本）は当時著名な画院画家、高文進の原図をもとに雍熙二（九八四）年十月十五日、僧知礼が雕印したとあり、この図像は釈迦の補処の菩薩として納入されたものか、と思われる。これら四枚の版画は釈迦を中心とした親近（しんごん）関係の聖衆と考えられるが、更に文殊・普賢像の各下段願文には各々の菩薩の功徳を祈願していて、独尊像としての意味をも持つことが解る。

この胎入文殊像の願文に注目すると、

伏以文殊大聖七佛祖師／為娑婆世界主首菩薩十／方諸佛法王之子若人供／養功徳無邊有文殊心真／言諸佛同演為惣持之首／乃秘密之宗若誦一遍如／誦天下大蔵経一遍普勧／諷持同登覺道／阿　若誦一遍能除行人一切苦難／　囉　若誦二遍除滅億劫生死重罪／　波　若誦三遍三昧現前／　遮　若誦四遍惣持不忘郝　若誦五遍速成無上菩提

この後半部、各行頭字を拾った「阿囉波遮郝」は文殊の真言「ア・ラ・ハ・シャ・ナゥ」に漢字を当てたもので、その下の文言は『金剛頂超勝三界経説文殊五字真言勝相』（不空訳）や『金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』（金剛智訳）（共に『大正新修大蔵経』以下、略して『大正蔵』第二〇巻）中の一文と一致する。後述

図1　清涼寺蔵　胎入　文珠菩薩騎獅像

するようにこれは密教の文殊でも、「五字文殊経」に説かれる文殊の根本功徳である。

密教の文殊には「一字」「五字」「六字」「八字」の四種があり、それは髪型――髻の数で区別される。この木版画上段の文殊像は下段の真言からも五髻に結った〝五字文殊〟のはずであるが、宝冠を着けていて明らかでない。

これとよく似た宋代の文殊騎獅像が松本栄一博士の『燉煌画の研究』中に紹介（同書七八三頁、同付図一九七　現大英博物館蔵）されているが、胎入木版画と像容的に近い上、敦煌画の方には〝五台山文殊〟と明記されている。では次にこの敦煌画文殊について述べてみたい。

## 二、敦煌画「文殊像」の性格

左図は先出の『燉煌画の研究』所収の文殊像である。

下段願文

此五臺山中文殊師利大聖真儀變／現多般威靈叵測久成正覺不／捨大悲隱法界身示天人相与萬／菩薩住清涼山攝化有縁利益弘／廣思惟憶念增長吉祥礼敬稱揚／能滿諸願普勸四衆供養歸依當／来同證菩提妙果

文殊師利童真菩薩五字心真言

阿　上　囉　跛　左　曩

文殊師利大威德法寶蔵心陁囉尼

唵　引　阿　味　囉　吽　引　佉　左　咯

對此像前随分供養冥心一境專

注課持廻施有情同歸常楽

この願文要旨は五台山文殊の威力を讃美し、文殊はその眷属である一万の菩薩と共に清涼山を住処として、衆生を導いているので、これに帰依供養することで菩薩の妙果が得られるとし、文殊の真言を二つ記している。その一つは「文殊師利童真菩薩五字心真言」として―阿・囉・跛・左・曩―これは清涼寺釈迦胎入の木版文殊像の願文と一致している。次の「文殊師利大威徳法寶蔵心陁羅尼」―唵・阿・味・囉・吽・佉・左・咯―は八字真言であり、出典は『文殊師利宝蔵陀羅尼経』（又は文殊師利菩薩八字三昧法、菩薩流志訳。『大正蔵』第二〇巻、八〇四頁下段）に

唵　阿味羅吽却嘶囉

と見え、また『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』（菩提仙訳『大正蔵』第二〇巻七八四頁中段）には

唵　阿味羅吽佉左　洛（イ・咯）

とあるが同一である。この真言は「八字文殊曼荼羅」の中央、八髻文殊をとり巻く文殊八大童子（同七八五頁中段）―請召・計設尼・救護慧・烏波計設尼・光網・地慧幢・無垢光・不思議慧童子の各々に真言を当て、その威力を示したと云うもので、五字真言と八字真言を併せて功徳を倍加させたと考えられる。

ここで注目したいことは、瑞像胎入の北宋文殊像と、敦煌画が上

大聖文殊師利菩薩
普勸志心供養受持
此五臺山中文殊師利大聖真儀變
現多般威靈叵測久成正覺不
捨大悲隱法界身示天人相与萬
菩薩住清涼山攝化有緣利益弘
廣思惟憶念增長吉祥礼敬稱揚
能滿諸願普勸四衆供養歸依當
来同證菩提妙果
文殊師利童真菩薩五字心真言
阿上 囉 跛 左 曩
文殊師利大威德法寶藏心陀羅尼
唵引 阿 味 囉 吽引 佉 左 咯
對此像前隨分供養冥心一境專
注課持迴施有情同歸常樂

図 2

段にほぼ同じ像容を掲げながら、何故、敦煌画の方にだけ〝五台山文殊〟を明記するのか――。

敦煌画の像容について松本栄一博士は『燉煌画の研究』中で次のように述べている。

上段に騎獅文殊の像を安じ、左右に「大聖文殊師利菩薩」「普勸志心供養受持」と記す。この獅上文殊が如意を把持せる姿は我國に類例罕にして、甚だ奇異に感ぜられるが、燉煌出の繪畫には案外この形の文殊像が多い。蓋し斯の如きは特に五臺山に於て善財童子に説法する文殊の姿を表せるものゝ如く、『阿娑縛抄』の「文殊五字」の條に、「持二如意一、是於二清涼山一値二善哉童子一説法之時形也」（大正藏、圖像、第九卷、二二七頁c）と記されて居る。今此圖の下段にも特に「此五臺山中文殊師利大聖云々」と記し、且、獅子の傍には合掌せる善財童子の姿が添へられて居る點などより考ふるも、この説は正しきものと見做し得るであらう。なほ童子の反對側には口綱を牽ける一人物あり、我國に於ける五使者を從へた所謂「渡海文殊像」の場合は、之を于闐國王と稱して居るが、蓋しそれは善財童子・于闐國王・佛陀波利・難陀童子・大聖老人の五從者の説に出でたるものであり、又一説には善財・須菩提・那羅延天・金翅鳥王・無盡惠菩薩の五者を選ぶ場合もあるが故にそれは必ずしも于闐國王とは見做し難いであらう。

この敦煌画文殊像は、五台山で如意を持ち、善財童子に説法する文殊を描いたもので、獅子に乗り、その從者五人については諸説あり、としている。

次に〝善財童子へ説法する文殊〟と〝獅子に乗る文殊〟について考えてみたい。

## 三、文殊の説法形と如意

松本博士引用の『阿娑縛抄』中、「文殊五字」の項には

。釋迦三尊。文殊如意像在レ之。無レ謂事也。持二如意一是於二清涼山一値二善財童子一説法之時形也。又无二持物一尊ニハ合掌ニ作事也。云々

と見えている。文殊と普賢を脇侍とした釈迦三尊形式で、文殊が如意を手にすることがあるが、特にいわれはなく、清涼山で文殊が善財童子に説法している形であり、また持物のない時は合掌形に作る、と云う。その善財童子への説法姿とはどのような根拠、出典によるものなのか――。

文殊と清涼山の関係については次の『大方広佛華厳経・菩薩住処品第二十七』（『大正蔵』第九巻）中の

東北方有二菩薩住處一。名二清涼山一。過去諸菩薩常於レ中住。彼現有二菩薩一名二文殊師利一。有二一萬菩薩眷屬一常爲説レ法。

との部分によってよく知られる処であるが、〝文殊が善財童子に如意を持って説法する〟と云う造形の根拠は、『華厳経』「入法界品」中に文殊の善財への説法は述べられても、その造形を示す文言

は全く見当らない。

ただ、この如意については『釈氏要覧』巻中に、次のように見えている。

如意　梵云阿那律。秦言如意。指歸云。古之爪杖也。或骨角竹木。刻作人手指爪。柄可長三尺許。或脊有痒。手所不到。用以搔抓。如人之意。故曰。如意。誠甞問譯經三藏通梵大師清沼。字學通慧大師雲勝。皆云。如意之制。蓋心之表也。故菩薩皆執之。狀如雲葉。又如此方篆書心字故。若局爪杖者。只如文殊亦執之。豈欲搔痒也。又云。今講僧尚執之。多私記節文祝辭於柄。備於忽忘。要時手執目對。如人之意。故名如意。若俗官之手版。備於忽忘。名笏也。若齊高祖賜隱士明僧紹竹根如意。梁武帝賜昭明太子木犀如意。石季倫王敦皆執鐵如意此必爪杖也。因斯而論則有二如意。蓋名同而用異焉

（『大正蔵』第五四巻・二七頁中下段）

如意は人の手指爪を模した木や竹製の三尺ばかりのもので、本来は手の届かない背中を掻く道具であったと云う。特に文中の「誠に嘗て訳経三蔵通梵大師清沼、字学通慧大師雲勝に問うに、皆云う、如意の制は蓋し心の表れなり、故に菩薩皆之を執る。状は雲葉の如し。又、此方は篆書の心字の如き故に、もし爪杖に局らかば、文殊のごとき亦之を執る。豈搔痒を欲せんや」に注目すると、元来、孫の手であったものが如意の制が出来てからは心の表れとされ、菩薩が皆手にする中でも、特に文殊の手にする如意は〝搔痒を欲するためではない〟と記されている。

『釈氏要覧』は宋の道誠の撰述で、真宗の天禧四（一〇二〇年＝後一条帝の寛仁四）年の序文があるため、宋代の文殊像の形態を示す資料として留意したい。これは奝然が太宗に謁して帰国の三十四年後、嘉因の帰国からは三〇年後のことになる。当時、宋では文殊菩薩は如意を手にする形で描かれるのが通例であったことになる。そうであれば、清涼山での善財童子への説法では文殊が如意を持つことは、宋代版画のごく一般的な形であったと考えられるだろう。

この〝文殊と如意〟の関係については稿を改め、僧侶との関わりやその造形の日本への影響等を考察したいと思う。

## 四、文殊騎獅像について

松本榮一博士著『燉煌画の研究』にある「文殊騎獅像が〝五台山文殊図〟と記されている」ことはすでに述べたが、文殊が獅子に乗る形が五台山文殊の特色であることは円仁の『入唐求法巡礼行記』にも詳細に述べられており、これについては小論『奝然将来〝五台山文殊〟と「延暦寺文殊楼」及び「文殊会」』（学苑674号、以下『奝然将来〝五台山文殊〟』と表記）で触れたので、その要点のみ列記する。

①『入唐求法巡礼行記』によれば、円仁は開成五（八四〇＝承和七）年五月十六日、五台山大花厳寺を訪れ、菩薩堂院に安置の文殊騎獅像を礼拝、その像は気韻生動の感が堂内に満ちたものであっ

た。

②同院の老僧によれば、この造像に六度も失敗した仏師がその理由を大聖文殊の心にかなっていない為と考え〝我ために真容を現わせばその姿を模して造らん〟と発願した。すると金色の獅子に乗って文殊が出現し、やがて五色の雲に上って飛び去ったが、仏師はこの姿を拝して七度目にこの像を完成したと云う。

③五台山諸寺で文殊像が祀られているが、皆、菩薩堂院のこの聖像を模したもので、その迫真力は百分の一に過ぎない、と円仁は記している。

④この聖像は『広清涼伝』によれば、唐の景雲年中（七一〇―七一一）、仏師安生作と云われる。

京都市立芸術大学の小島彩氏の論文「騎象普賢と騎獅文殊の図像――中国における成立過程――」(註2)によれば〝騎獅子文殊は初唐の七世紀後半に中国で誕生し、更にこの文殊像は五台山における文殊化現信仰の影響によって大きく発展したと考えられること〟等が述べられている。

いずれにしろ円仁も記している五台山文殊化現の説話が、それ以降の中国の文殊信仰に大きく作用したことは確かと云えるだろう。

それでは騎獅文殊の眷属、童子と御者は何に由来するのか――

## 五、童子と御者の由来

入唐求法の後、円仁が比叡山に文殊楼を建立、そこに五台山の騎獅文殊を造立したことは前出の小論（学苑674号）ですでに述べた。

太政官符

應下以二延暦寺文殊影嚮楼一爲中誓二護聖朝一處上事

五間楼一基高五丈三尺 廣五丈三尺 縦三丈八尺

正體文殊坐像一軀高四尺八寸

化現文殊乗師子立像一軀高八尺

脇侍文殊立像四軀高各五尺三寸

侍者化現文殊童子立像一軀高五尺三寸

師子御者（ダトリ）化現文殊丈夫立像一軀高五尺三寸

（『類聚三代格』巻三）

この太政官符の表記から、高さ八尺の主尊化現騎獅文殊は七体一具と見られ、特に後の童子と御者二像には〝化現文殊との関係〟を示すが、文殊立像四体は〝脇侍〟とあるに過ぎない。〝文殊立像四体〟が脇侍となる形式は、我国で一般的な騎獅文殊の三尊、あるいは五尊一具からすると特異なものである。

平成元年三月と同九年八月、五台山を訪れた際、山下の南禅寺大殿中の主尊、釈迦の左方（向って）に四体の脇侍立像と童子・御者の一具を実見したことにも留意したい。

脇侍文殊立像四体は化現文殊・童子・御者の取り合せとは別な由

来譚の存在を考える必要があるか――。

唐代以後、五台山上の諸寺は破仏や焼亡、あるいはラマ教化等、重修がくり返され、変容も大きいと思われ、推論に過ぎないが、円仁入唐の際、この五台山上で拝した化現文殊――特に菩薩頂院で見た造形構成をこそ、比叡山文殊楼に〝再現〟しようとしたとは考えられないだろうか。これは今後の課題の一つとしたい。

次に問題を化現文殊乗獅子立像と侍者童子・師子御者に絞ってみると、その個別の名称は明らかでないが、当時すでに三尊の形式は成立していたと考えられる。それではこの二者に〝善財童子〟や〝于闐王〟が付会されたのは何時のことなのか。

これについて田中喜作氏が「画説」（昭和16年）の『文殊渡海』の中で次のように述べている。

**實感應要略錄**（大正新修大藏經五十一卷）**卷下第二、文殊化身爲貧女感應の條に、**

**昔者貧女があつたが、寺の齋會に際して食を乞ふこと極めて貪猾であつたので、寺僧いたく是を叱呵するや、倏ち地を離れて文殊身を現じ、抱いて居た二兒はまた善財童子と于闐王に化したと云ふ話がある。是は清涼傳にも、また圓仁の求法巡禮記にも記されて有名な話である。こゝに此の二侍者が先づ出て來る。これから見ると前記の燉煌畫の圖樣は正しく是だと云つて誤は無いであらう。松本君は阿娑縛抄所出の善財以下の五使者の外に、別に文殊使者としては、善財、須菩提、那羅廻天、金翅鳥王、無盡惠菩薩を数へる一説もあるから、本圖の手綱を執る一侍者に就いて、必ずしも于闐王とは見做し難いであらうと云はれたが、此の圖樣より見ても、是を于闐王と見ることの方が正しいと云はなければならぬ。（原文のまま）**

これは田中氏が、松本榮一氏『燉煌画の研究』に紹介された「文殊騎獅像」について書いたものである。その十二年後、昭和二十八年に脊然将来の釈迦像内（嵯峨清涼寺）から宋代の木版騎獅像が発見されたが、この田中氏の推論は多分、当を得たもので、脊然将来の木版画中の二人は善財童子と于闐王と考えられる。

但し、田中氏の文には幾つかの齟齬があるので次に述べたい。

その第一は、田中氏は「この貧女の話は清涼伝にもある」と云うが、この『三宝感應要略録』（宋代、非濁の編集）中の「文殊化身爲貧女感應」（註3）の件は元来、原典が『広清涼伝』巻中「菩薩化身爲貧女・八」にあり、これを簡略化して収めたものである。因みに『広清涼伝』は沙門延一の編集で、宋の仁宗嘉祐五（一〇六〇）年正月の出版とある。

『広清涼伝』所収の原典要旨（註4）は次のようである。

「大孚霊鷲寺は東漢に創立され、のち魏によって建立された。いつの頃か歳初めの大斎に一人の貧女が二児と犬一匹を連れて来るが、貧しい為、自分の髪を切って布施をした。そして二児と犬のために食を乞い、更には妊婦である女は腹中の児の分まで求めたので、僧は怒ってこれを去らせた。すると貧女はたちまち地を離れて文殊と化し、犬は獅子に、二児は善財童子と于闐王となって、五色

の雲がたなびいた……。以後、貴賤、貧富などで扱いに分けへだてすることがなかった。貧女が髪を布施し、文殊と化して雲に乗ったその場所に塔を建立した。これが今も華厳寺東南隅にある塔である」と。

この大孚霊鷲寺は『古清涼伝』巻上には「大孚図寺、寺本元魏文帝所立。帝曽遊止。具奉聖儀。爰発聖心。創茲寺宇。孚者信也。」とあって、華厳寺を指す。(『大正蔵』第五一巻一〇九四頁上段)

第二点は「円仁の『入唐求法巡礼行記』にも記されている……」と田中氏は書いているが、『巡礼行記』の記述に貧女の話はあるが〝善財童子〟や〝于闐王〟の呼称、犬の話は見当らない。(註5)

従って唐代の沙門慧祥の『古清涼伝』にも、『巡礼行記』にもないが、宋代の『廣清涼伝』ではその呼称が見えることからも、唐宋の間に発展した説話と考えられる。因みに、この貧女伝説は現在、台懐鎮地区にある円照寺内での出来事とされ現在、由来板等が立てられている。

このように辿ると、円仁が比叡山に造立した化現文殊の、童子と御者に明白な名称が伝来しただろうか。また五台山で実見した円仁が文殊楼に造立したのが、化現文殊と童子・御者である以上、三尊が基本形ではなかったか。それまであった貧女伝説に唐宋の間、善財童子と于闐王の名が付会されて、五台山に重要なモチーフの起源譚に利用したかと考えられるだろう。ただ、それがどのようにして現在の脅然将来の五尊形へと変化したのだったか――。

## 六、騎獅文殊の三尊形と五尊形

『梁塵秘抄』の中で「文殊を日本に伝えたのは脅然聖の功、お供に優闐王や大聖老人、善財童子、仏陀波利、十六羅漢諸天衆をつれて……」と詠われていることから、文殊・善財・優闐の三尊に大聖老人と仏陀波利が加わっての五尊形が当時の日本では〝五台山文殊〟と認識されたようである。ただ、この五尊形については前出の『燉煌画の研究』中、「一説には善財・須菩提・那羅延天・金翅鳥王・無尽恵菩薩の五従者を選ぶ場合もある……」と見え、或いは婆数仙をあげることもあるので、五尊形に厳密な定型があった訳ではないようである。

しかし、『梁塵秘抄』の云う仏陀波利と大聖老人は、五台山の文殊信仰との深い関わり――『仏頂尊勝陀羅尼』の霊験譚――が広く流布していたことからも〝加えられるべき〟当然の存在、と云ってよいだろう。

この霊験譚は『佛頂尊勝陀羅尼経序』(註6)に明記されるが、その概略は以下のようである。唐の高宗の儀鳳元(六七六)年、波羅門僧仏陀波利は西国から五台山をめざし、文殊大聖の真容を拝することを願ったが、一老人が現われて、漢地では衆生が罪業を重ね、出家者も戒律を犯す者が多い。ただ『佛頂尊勝陀羅尼』があれば、その威力によって衆生の一切苦を救いうるため、経の所持の有無を問われた。もし、この経をもたらせば、その望みのように文殊の所在を示

そうと云った。そのため仏陀波利は西国へ戻り、経を持って永淳二（六八三）年再来、西京でその次第を上奏した。高宋はこれを勅命を以って翻訳させたと云う。

この『尊勝陀羅尼経』については唐の大暦十一（七七六）年、時の皇帝代宗が天下の僧尼に誦持させるよう勅命を出している。

勅天下僧尼誦尊勝真言　制一首

奉　勅語李元琮。　天下僧尼令誦仏頂尊勝陀羅尼。限一月日誦令精熟。仍仰毎日誦二十一遍。毎年至正月一日。遣賀正使。具所誦遍数進来

大暦十一年二月八日　内謁者監李憲誠宣

『代宗朝贈司空大辨正廣智三蔵和上表制集』

（『大正蔵』第五十二巻八五二頁下段）

この勅命によって天下の諸寺で誦され、大いに流布されたようで、三十種もの陀羅尼経が漢訳され『加句霊験佛頂尊勝陀羅尼記』（註7）（朝議大夫兼侍御史武徹述）と云う霊験譚も伝えられている。

また円仁も『入唐求法巡礼行記』の開成五（八四〇＝承和七）年五月二十三日の条で、仏陀波利と老人の話をのせ、『尊勝陀羅尼経』を持って再来した仏陀波利と文殊が共に金剛窟（五台山中、文殊の住処とされる）に入った、と記している。

この霊験譚の流布と共に、文殊の三尊形とは別に、仏陀波利と大聖老人を加えた五尊形も成立して、二通りの型が出来ていったことも考えられる。

## 七、五字・八字真言の複合体―五台山文殊

それでは嵯峨清涼寺の釈迦胎入「文殊三尊形」に対して『燉煌画の研究』にある「文殊三尊形」が、特に〝五台山文殊〟と明記される理由は何によっているのか――。

両図像下半の文殊の五字真言と八字真言の差異を検討してみたい。

五字真言「ア・ラ・ハ・シャ・ナゥ」、この真言の本尊五字文殊について『密教大辞典』（法蔵館）には「その尊形によりて五髻文殊とも云ふ。単に文殊と云ふは此尊なり」とあって、五字文殊が一般的な文殊菩薩の形式と述べていることに注目したい。また同辞典の「五字文殊法」の項には「五字文殊を本尊とし阿羅跛者那の五字の真言を念じて聰明智慧を求むる法なり」しているが、唐の不空訳『金剛頂超勝三界経説文殊五字真言勝相』（『大正蔵』第二〇巻七〇九頁中段）には、その功験を次のように記している。

若誦一遍能除行人一切苦難。若誦兩遍除滅億劫生死重罪。若誦三遍三昧現前。若誦四遍總持不忘。若誦五遍速成無上菩薩。

この真言を一度誦しただけで一切の苦難を除くことが出来、五回ならば悟りが開けると。云わばこれが個人的な救いや悟りに関するのに対し、八字文殊の真言「アク・ビ・ラ・ウーン・キャ・シャ・ラク」は、小論『脅然将来〝五台山文殊〟』（学苑674号）に詳述したように、天変地異や国王の安穏を祈願する〝国家鎮護〟の秘

法である。それ故にこそ、円仁が帰国後、五台山に習っての「皇帝宝祚長久、佛法興隆」を目的とした比叡山への文殊楼建立の奏上は裁下され「八字文殊法」が独占的に修されたと考えられる。

それでは、この文殊楼の「八字文殊秘法」を修する本尊はどのような像容であったのか――。ここには前出の太政官符（五、童子と御者の由来の項参照）にあるような仏像群が安置されたが、その冒頭には「正体文殊坐像一軀　高四尺八寸」と記されており、前出の小論では八字文殊の本尊としてこの〝正体文殊〟を想定したが、それより外には八字文殊法を修すべき中心は考えにくい。

このように見てくると〝五台山文殊〟と云うのは①一万の眷属を率いた生身文殊が善財童子に説法する『華厳経』の文殊　②密教的救いと悟りを示す〝五字文殊〟の性格、更に③天変地異や護国を修する〝八字文殊〟としての意義――等々を併せ持ったもの、と考えられる。

〝五台山文殊〟を真言で表わす時、五字真言では足りず、八字真言を加えることにより〝五台山文殊〟と云えたのではないだろうか。

以上が『燉煌画の研究』所載の「五台山文殊」に両真言が併記されていることへの一考察である。

このような両真言の併記は、鎌倉期に叡尊・忍性等が奈良坂の般若寺に供養した渡海文殊像供養願文[註8]にも、五字と八字の文殊曼荼羅をその胎内に描いたと見えている。これは渡海文殊像が五台山の文殊であるための両真言供養とは考えられないだろうか。

## 八、不空三蔵と文殊信仰

五台山文殊の信仰を見る上で、不空三蔵の存在は見逃し難いと思われる。

唐朝中期、不空は国師として玄宗、粛宗、代宗の三代の皇帝に厚遇されたが、五台山に金閣寺を建立したことでも知られている。

不空は開元二十四（七三六）年、道義がその建立を念願したもの[註9]の、中断状態にあった五台山金閣寺の造営を代宗に上奏し、永泰二（七六六）年五月一日勅許を得ている。この造営には膨大な国費がかけられ、円仁が約七〇年後の開成五（八四〇）年七月二日に訪れた時にも、まだ第三層壁の曼荼羅は彩色が未了であったと『入唐求法巡礼行記』は記している。

円仁は金閣寺について「九間三層[註10]、高さ百尺余、壁・簷（のき）・椽（たるき）・柱は処として画かざるなし」とあり、第一層は「大聖文殊菩薩の青色師子に騎れる聖像」、第二層には「金剛頂瑜伽五仏、毎仏に各二脇士あり、並びに板檀上に於て列置す」と。更に「第三層は頂輪王瑜伽会五仏と毎仏一脇士菩薩あり、二菩薩は合掌を作す、像は仏の前面にあり、南に向って立つ」と記している。

不空の上奏文[註11]によれば「金閣寺・王花寺・清涼寺・花厳寺・呉摩子寺の五寺は常に仁王護国経と密厳経を護国のために転ず」とあるので、密教による護国修法がされたと知れるが、金閣寺の造営が文

殊による護国のためとされるにも拘らず、八字文殊の修法がされた記録は明らかでない。

ただ、円仁が比叡山に文殊楼を造立したことからも、五台山での文殊護国の修法の知見が、この造営に起因すると考えられるが、あるいは、不空の死後半世紀ほどを経て円仁の参拝までの変転を考慮しなければならないか――。

更に不空の文殊信仰で触れなければいけないのは「天下寺食堂中置文殊上座」と云う上奏(註12)をして大暦四（七六九）年十二月十九日に勅許が下ったことである。これによって全国の寺の食堂に安置されていた賓頭盧尊者に代えて、文殊像が置かれることになった。

不空は「勅置天下文殊師利菩薩院」を上奏(註13)し、大暦七（七七三）年十月十六日、京城及び天下の僧尼寺内に文殊院を造立するとの勅許を得ている。

この天下の寺院に安置されたと云う文殊の像容は、おそらく騎獅文殊像であったと考えられ、この措置による五台山文殊の流布に不空三蔵が果たした役割は大きかったと云えるだろう。

以上みてきたように、日本に五台山文殊の原形を将来した円仁が、比叡山に造った文殊楼に安置したのは、化現騎獅文殊と侍者童子、御者の三尊形であったと推測される。しかしその像が伝存しない今、文殊の像容や持物も明らかではないが、小論『脅然将来〝五台山文殊〟』（学苑674号）で触れたように、文殊楼を再建した第十八代座主良源が

文殊三昧耶。身有二種。一利劒。二梵篋。梵篋智慧之徳。利劒利智之用也。

（『慈恵大師伝』続群書類従・第八巻下）

と述べていることからも、再興された化現文殊像の形態や持物は〝先例を踏襲〟したものと考える方が自然ではないか。

唐代の化現文殊が、宋へかけての五台山信仰の発展によって、如意を持つ騎獅像と侍者達と云う形になったとすれば、脅然が将来した五台山文殊も釈迦瑞像胎入の木版画にあるような、如意を持つ姿であった可能性が高いのではないか――。その当否を考える上でもこの如意を持つ騎獅像が、日本の文殊の造形に与えた影響を検討する必要があるだろう。

**註**

（1）同一の文言が『金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』は大正蔵第二〇巻七一〇頁中段に、『金剛頂超勝三界経説文殊五字真言勝相』は同巻七〇九頁中下段にあり、双方内容は酷似しており、原典は同一か。前者では文殊の真言「ア・ラ・ハ・シャ・ナゥ」を「阿囉跛者娜」、後者では「阿囉跛左曩」としている。

（2）同論文は「美術史」第137号（平成七年三月）所収。神仙思想まで遡ってその発達史を追求している。

（3）『三宝感應要略録』巻下、「貧女伝説」は次のようなものである。

第二文殊化身爲貧女感應 出清涼傳

世傳。昔有貧女。遇齊會起集。自南而來。凌晨屆寺。携抱二子。一犬隨之。身無餘資。剪髮以施。未遑衆食。白主僧曰。欲先食遽就他行。僧亦許可。命僮與饌三倍貽之。意令貧女二子俱足。女曰。犬亦當與。僧勉强復與。女曰。我腹有子。更須分食。僧乃憤然語曰。汝求僧食無厭。若是在腹未生。若爲須食。叱之令去。貧女被呵。即時離地。倏然化身。即文殊像。犬爲師子。兒即善才及于闐王。五色雲氣。靄然遍空。因留偈曰。苦瓠連根苦。甜瓜徹蔕甜。是我超三界。却彼阿師嫌。菩薩說偈已。遂隱不見。在會緇素。無不驚嘆。主僧恨不識眞聖。欲以刀割目。衆人苦勉方止。爾時貴賤等。視貧富無二。遂以貧女所施之髮。於菩薩乘雲起處。建塔供養矣。

（『大正蔵』第五一巻　八四九頁上中段）

（4）『廣清涼伝』巻中の原文

菩薩化身爲貧女八

大孚靈鷲寺者。九區歸嚮。萬聖修崇。東漢肇基。後魏開拓。不知自何代之時。每歲首之月。大備齋會。遐邇無間。聖凡混同。七傳者。有貧女。遇齋赴集。自南而來。淩晨屆寺。携抱二子。一犬隨之。身餘無貲。剪髮以施。未遑衆食。告主僧曰。今欲先食。遽就他行。僧亦許可。命僮與饌。三倍貽之。意令貧女二子俱足。女曰。犬亦當與。僧勉强復與。女曰。我腹有子。更須分食。僧乃憤然語曰。汝求僧食無厭。若是在腹未生。曷爲須食。叱之令去。貧女被訶。即時離地。倏然化身。即文殊像。犬爲師子兒。即善財及于闐王。五色雲氣。靄然遍空。因留菩偈曰

苦瓠連根苦　甜瓜徹蔕甜
是吾起三界　却彼可師嫌

菩薩說偈已。遂隱不見。在會緇素。無不驚嘆。主僧。恨不識眞聖。欲以刀剜目。衆人苦勉方止。爾後。貴賤等觀。貧富無二。遂以貧女所施之髮。於菩薩乘雲起處。建塔供養。聖宋雍熙二年。重加修飾。塔基下。曾掘得聖髮三五絡。髮知金色。頃復變黑。視之不定。衆目咸觀。誠亘思議。遂還於塔下藏瘞。即今華嚴寺東南隅塔。是也

（『大正蔵』第五一巻一一〇九ページ中下段）

（5）円仁は開成五（八四〇）年七月二日、義円らと共に金閣寺参拜後、更に西の南台を巡礼、大花厳寺の貧女伝説を記している。

此の山に入る者は自然に平等の心を起こすを得るなり。山中斎を設くるは、僧俗、男女、大小を論ぜず平等に供養して、其の尊卑、大小を看ず。彼に於いては皆文殊の想を生ず。昔者大花厳寺は大斎を設け、凡俗、男女、乞匄〔乞食人〕、寒窮〔困窮〕の者尽く来たって供を受く。施主悁嫌〔いかりきらう〕して云う、「遠く山坂を渉り、此に到って供を設く。意は只山中の衆僧を供養する為なり。然るに此の塵俗、乞索児〔乞食人〕等尽く来たって食を受く。我が本意にあらざるなり。若し此等の色を供養するならば、只本処に斎

を設けしめん。何ぞ遠く来たって此の山に到るを用いん」と。僧に勧めて皆飯食を与えしむ。乞匄中に一孕女の懐妊せるあり。座にありて備さに自分の飯を受け、食し訖って更に胎中の孩〔孩〕子〔みどり子〕の分を索む。施主之を罵って与えず。其の孕女は再三云う、「我が胎中の児は未だ産生せずと雖も、而も且是人の数なり。何ぞ飯食を与えざるや」と。施主曰わく、「爾は愚癡なり。胎裏〔中〕の児は是一数なりと雖も而も出で来たらず。飯食を索め得たる時、誰に与えて喫わしむるか」。女人対えて曰わく、「我が胎裏の児、飯を得ざれば即ち我も且喫うこと得るに合わず」と。便ち起って食堂を出ず。纔かに堂門を出ずるや変じて文殊師利と作り、光を放って照曜し、満堂赫奕〔かがやく〕たり。皓玉〔白玉石〕の貌、金毛師子に騎り、万の菩薩周遶し、空に騰って去る。一会〔会座〕の衆、数千の人、一時に走り出で忙然として覚えず地に倒れ、声を挙げて懺謝す。悲泣して涙を雨らし、一時に大聖文殊師利を称唱す。声竭き喉涸るるに迄ぶも、終に廻顧を蒙らず〔戻らなかった〕。髣髴として見えず。大会の衆は飯を飡うも味なく、各自発願す。今より已後、供〔養食〕を送って斎を設けるとき、僧俗、男女、大小、尊卑、貧富を論ぜず、皆須らく平等に供養すべし、と。山中の風法〔宗風〕は斯に因って平等の式を置く。自余の霊化は頻りに現われて瑞多きことは天下共に知る。今斎会を見るに、食堂内に於いて丈夫〔男〕一列、女人一列、或いは孩児〔みどり子〕を抱くも児の分を得。童子一列、沙弥一列、大僧一列、尼衆一列。皆床上に在って供食を受け、施主は平等に〔施〕食を行ず。人あり、分外に多く索むるも、且つ之を怪しまず。多少に随って皆之を与う。

（釈文は足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』東洋文庫）

（6）『佛頂尊勝陀羅尼経序』は『大正蔵』第十九巻、三四九頁

（7）『加句霊験仏頂尊勝陀羅尼記』は『大正蔵』第十九巻、三八六頁

（8）文永四（一二六七）年、叡尊造立、般若寺丈六文殊造立願文（重文）

「願文」

奉造立白檀周丈六文殊師利菩薩像一軀。

奉図御身裏五字文殊曼荼羅。八字文殊曼荼羅。金剛界曼荼羅。胎蔵界曼荼羅。

奉納御身内仏舎利五十三粒。大般若経一部六百巻。般若心経一千巻。宝篋印陀羅尼一千遍。本尊真言各一万遍。余尊真言各一千遍。一字三礼妙法蓮華経一部八巻。同開結二経阿弥陀般若心等経各一巻。同最勝王経一部十巻。比丘比丘尼菩提心願文七十五通。奉加帳一通。

納花座中受菩薩戒七衆三万百五十八人名帳。所々殺生禁断等状（奉脱カ）五十六通。

（9）不空の金閣寺造営の上奏文は『代宗朝贈司空大辨正廣智三蔵和上表制集巻第二』所収（以下『不空三蔵表制集』と略）

請捨衣鉢助僧道環修金閣寺　制一首

五臺山金閣寺

右大興善寺沙門。特進試鴻臚卿大廣智不空奏。上件寺　先聖書額寺宇未成。准開元二十四年衢州僧道義至臺山所見文殊聖迹寺。號金閣院。有十三間居僧衆。云有萬人。臺殿門樓茲金所作。登時圖畫一本進入在内。天下百姓咸欲金閣寺成。人誰不願。令澤州僧道環日送供至山。遇慕道義禪師所見之事。發心奉爲　國家依圖造金閣寺。院宇多少一如所見。今夏起手工匠什物茲自營辨。將滿　先聖御額終成道義感通。觀夫此僧志願非小。或謂文殊所假俾樹勝因。且五臺霸山寺額有五。清涼・華嚴・佛光・玉花・四寺先成。獨唯金閣一所未就。既是聖迹。誰不具瞻。不空願捨衣鉢隨助道環建立盛事。嘗恐歲不我與。愆于宿心。屢亦奏聞　天恩矜允。夫以文殊聖迹聖者爲主。結構金閣非陛下而誰。棟梁者大厦是依。股肱者元首所託。共成一體和叶萬邦。金閣斯崇。非夫宰輔贊成軍客匡助百寮咸續千官共崇。則何以表君臣之美。以光金閣之大也。保壽寺大德沙門含光奉使。迴臺恭修功德。伏望便於造寺所奉宜　聖旨祈所厥誠。庶霸神照明。以介景福康寧寰宇保祐聖躬。如天恩允許請宣付所司

中書門下　牒大廣智不空三藏

牒奉　勅宜依牒至准　勅故牒

永泰二年五月一日　牒

（『大正蔵』第五二巻・八三四頁上中段）

（10）『入唐求法巡礼行記』開成五年七月二日の条に次のようにある。

二日、義円供〔養〕主及び寺中の数僧と共に、金閣を開して大聖文殊菩薩の青色の師子に騎れる聖像を礼す。金色の顔貌は端厳にして比喩すべからず。又霊仙聖人の手皮の仏像及び金銅の塔を見る。又辟支仏の牙、仏の肉身舎利を見る。菩薩の頂に当って七宝の傘蓋〔天蓋〕を懸く。是勅施の物なり。閣は九間三層、高さ百尺余。壁・簷・椽・柱は処として画かざるなし。内外は荘厳にして世の珍異を画き、顕然〔大きくおごそか〕として独り杉林の表に出ず。白雪は自ら下にありて靉靆〔雪がたなびく〕たり。碧層〔青空〕は超然として高く顕わる。次に第二層に上り金剛頂瑜伽五仏の像を礼す。斯乃ち不空三蔵が国の為に造る所なり。天竺〔インド〕那蘭陀寺の様〔式〕に依りて作る。毎仏は各二脇士あり、並びに板壇上に於いて列置す。次に第三層に登り、頂輪王瑜伽会五仏の金像を礼す。毎仏に各一脇士菩薩あり。二菩薩は合掌を作す。像は仏の前面にあり、南に向かって立つ。仏菩薩の手印、容貌は第二層の像と各異なれり。粉壁の内面には諸尊の曼荼羅を画くも塡色〔彩色すること〕は未だ了らず。是亦不空三蔵が国の為に造る所なり。

（前出、東洋文庫本）

（11）不空の上奏文は『不空三蔵表制集』第二に収録

代州五臺山金閣寺玉花清涼花嚴呉摩子等寺

右特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大廣智不空奏

文殊聖跡自古攸仰。今遇　陛下特更增修精建伽藍　恩命稠疊。是可百神潛祐萬聖來歸。靈蹤建興於斯爲處。處既嚴潔。人亦宜然。艱難已來僧徒漸少。或經行化物便住人間。或蘭若隨緣。周栖他處。遂使時中禮懺鐘梵遞虧。樹下禪龕蛛網交闇。福田未廣有愧聖心。伏乞　天恩先在山中行人童子久精苦者。寺別度二七人。兼諸州抽道行僧一七人。每寺相共滿三七人爲國行道。有闕續塡。金閣等五寺常轉仁王護國及密嚴經。又吳摩子寺名且非便。望改爲大曆法花之寺。常爲國轉法花經。同五寺例免差遣其所度人。望委雲京將軍宗鳳朝與中使魏明秀。又修功德沙門含光簡擇。冀無偷濫。又清涼寺爲大聖文殊造閣已畢。伏望　天恩賜書一額永光來葉

中書門下　牒大廣智不空

牒奉　勅宜依牒至准　勅故牒

大曆二年三月二十六日牒

（『大正蔵』第五二巻八三五頁中下段）

(12)　不空の上奏文は『不空三蔵表制集』第二に収録

天下寺食堂中置文殊上座　制一首

大聖文殊師利菩薩

右京城大德特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空等奏。忝跡緇門。久修梵行。習譯聖典。頗悟玄門。大聖文殊師利菩薩。大乘密敎皆周流演。今鎭在臺山。福滋兆庶。伏惟實應元聖文武皇帝陛下。德合乾坤。明並日月。無疆之福康我生人。伏望自今已後、令天下食堂中於賓頭盧上特置文殊師利形像以爲上座。詢諸聖典具有明文。僧祇如來尙承訓旨。凡出家者固合揮衣。普賢觀音猶執拂而爲侍。聲聞緣覺擁彗而居後。斯乃天竺國皆然。非僧等鄙見。仍請永爲恒式

中書門下　牒祠部

牒奉　勅大聖文殊師利菩薩法王之子。威德特尊爲諸佛之導師。洗群生之心目。康我兆庶。是拯無邊　不有尊崇。人何瞻仰。今京城大德懇玆申奏。雅合聖典。所請宜依牒至准

勅故牒

大曆四年十二月十九日

（『大正蔵』第五二巻八三七頁上下段）

(13)　不空の上奏文は『不空三蔵表制集』第三に収録

勅置天下文殊師利菩薩院制一首

中書門下　牒不空三藏

牒奉。勅京城及天下僧尼寺內。各簡一勝處置大聖文殊師利菩薩院。仍各委本州府長官卽句當修葺。并素文殊像裝飾綵畫功畢。各畫圖其狀聞奏。不得更於寺外別造。牒至准　勅故牒

大曆七年十月十六日牒

（『大正蔵』第五二巻、八四一頁下段）